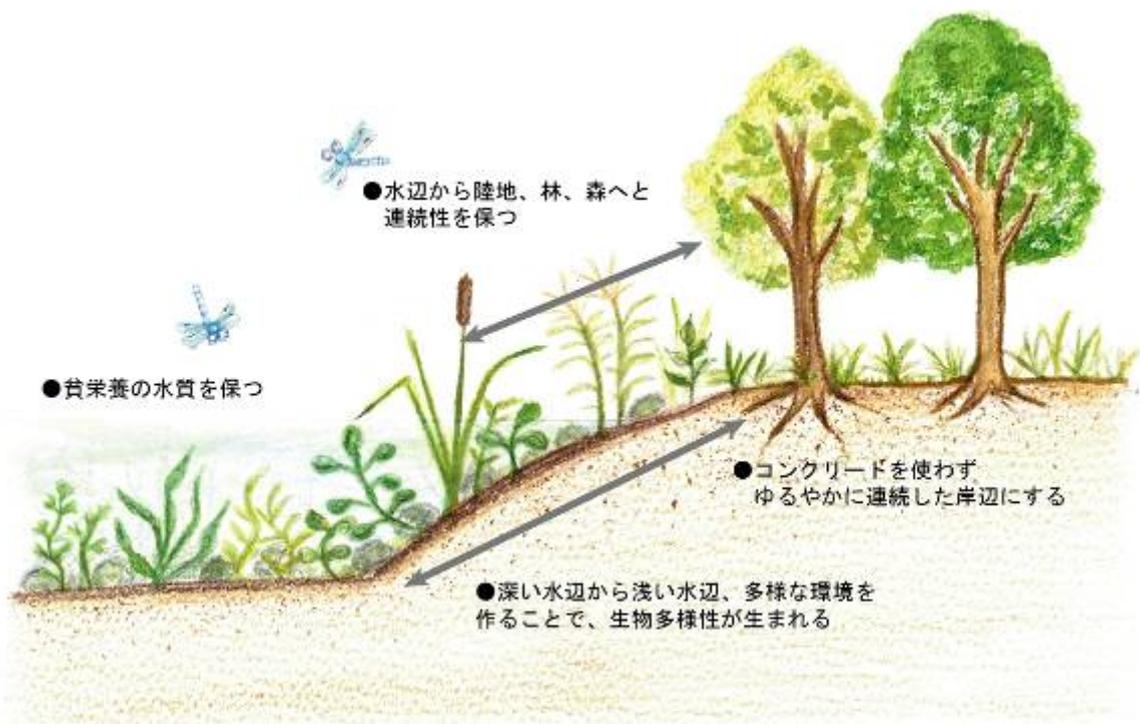


## 2-4 水田・ため池等

日本では、いたるところに水田が作られ、水田とそのまわりのため池、水路などは、カエルやサンショウウオ、メダカやトンボ、多くの水草にとって重要なすみかになっていました。しかし、農地の転用や耕作放棄によって水田の面積は徐々に少なくなっています。とくに、生きものの多い谷間の水田は生産性が低いことなどから、まっ先に消えていきました。また、ため池や水路の岸辺がコンクリート護岸に変わることによって、生きものの姿がめっきり少なくなりました。最近では、生きものが多い水田、ため池を取り戻すために、整備や管理のやり方にさまざまな工夫がなされています。



ハッチョウトンボ



トノサマガエル



ゲンゴロウ



メダカ

### ■コラム■水辺の外来種問題

人によって他の地域から持ち込まれた生きものは「外来種」と呼ばれ、世界中で問題になっています。里地里山の水辺では、ブラックバス、ブルーギル、アメリカザリガニ、ウシガエルなどの外来種が広がり、もともと日本にいた生きものを食べたりして生態系に深刻な影響をもたらしています。ひとたび持ち込まれた外来種を取り除くのはとてもたいへんです。まだ侵入していないところには、絶対に持ち込まないことが大切です。



ブラックバス



アメリカザリガニ

## (1) 水田

水田のうち、谷津田と棚田は、林と隣り合っているか、里山に囲まれた谷あいの水田です。カエルやサンショウウオなどの両生類、ドジョウやメダカなどの魚類、トンボやゲンゴロウなどの水生昆虫が集まります。特に、隣接する林と水辺の両方を行き来する両生類やトンボにとって重要なすみかになっています。

最近では、田んぼの学校、棚田オーナーや、ビオトープ作りなど、都市住民や企業、学校などと協力した維持活動が始まっています。

河川の氾濫源や平野にある湿地のような水田は、シギ類・チドリ類の渡りの中継地になり、冬期には、ガン・カモ類が刈り取り後の二番穂や落ち穂や耕起後に生える雑草などを目当てに飛来します。冬期間、鳥たちのための環境を整えるには、冬水田（冬期湛水水田）が有効です。



## (2) ため池

ため池とは、農業に使うための水をためる池で、多くは人工的に作られたものです。大きな川から水田に水を引けない地域には、ため池がたくさんあります。岸辺が土でできたため池には、さまざまな水草が生えています。水草は他の生きものにとっての産卵場や隠れ家を提供するため、ため池にはゲンゴロウやキトンボなど多くの水生昆虫が生息しています。また、水田にすむ生きものにとっても重要な環境で、田に水がなくなる夏期や冬期には、避難場所として機能しています。ため池の維持には、土手の草刈りや水抜きなどの大規模な作業が必要です。



福井県越前市 ため池



福井県越前市 山際の湧水と湿地

### (3) 小川 (水路)

水田のそばを流れる小川は、水田への水の供給や排水を行う水路です。水田から上流の小川はため池や川に、下流は川から湖や海へとつながっている水のネットワークです。このネットワークは生きものにとって大切な存在です。魚類は産卵や越冬のために小川のネットワークを伝って水田と川や海の間を移動することができます。小川の水草は水生昆虫や貝類を育て、多くの魚類のすみかとなります。水路と水田、水路と河川の間には大きな段差があると魚類が行き来できなくなり、生きものの生息環境のネットワークが切れてしまいます。



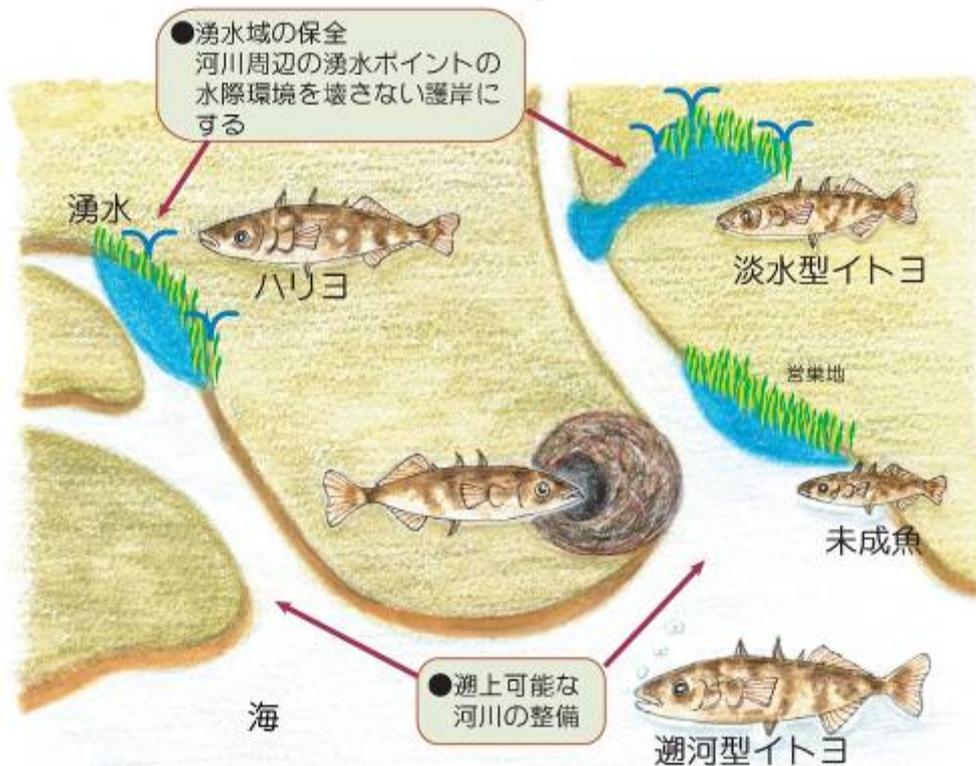
新潟県佐渡市

### (4) 湧水地と湧水湿地

湧水地とは、一年を通じてきれいな水が豊富に湧いている水源のある池や川です。昔は、飲用水や生活用水として使われていました。湧水地にすむ生きものは、イトヨやトミヨ、ホトケドジョウ、バイカモなどです。水のネットワークの起点として、里地里山の生きものには重要な場所です。

湧水湿地とは、湧水が地表をぬらし比較的貧栄養状態になっている湿地です。山と水田の境界や土手などの斜面でわずかに湧水があるような特殊な場所にできることが多く、栄養が乏しくとも生育できるオオミズゴケなどの背の低い湿性植物やモウセンゴケなどの食虫植物が生育しています。また、日本一小さなトンボであるハッチョウトンボも生息しています。

この湧水湿地は面積が小さいことが多く、見逃されてしまいがちですが、湧水地とともに重要です。



イトヨ類の生態を示す模式図 (本願寺清水イトヨの里展示資料より改変し作成)